

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (特設分野研究)

研究期間：2017～2022

課題番号：17KT0134

研究課題名(和文) 相互行為における複様式的知覚と共感的反応の解明 会話分析と概念分析をとおして

研究課題名(英文) Multisensory Perceptions and Affiliative Responses in Interaction

研究代表者

西阪 仰 (Nishizaka, Aug)

千葉大学・大学院人文科学研究院・教授

研究者番号：80208173

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：心理学では、錯覚研究において、異なる様式の知覚が相互に影響しあうことが研究されている。一方、哲学では、とくに現象学において、「ガラスの硬さを見る」というような「共感覚」の重要性が指摘されてきた。共感的現象は、実際に触れていなくても、触覚的狀態(硬さ)を見るという、異なる知覚様式の相互影響とは異なる現象である。さらに、同じものを見ていても、(たまし絵のように)それが多様な見え方を許容することがある。本研究では、このような多様な知覚のあり方が、実際の活動のなかで、特定の行為の構成成分として組織されることを、会話分析の方法を用いて明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、複様式知覚について、実験という方法を用いるのではなく、私たちが日々実際に営む相互行為をビデオにとり、その相互行為のなかでそのような知覚がどう達成されるかあるいは何を達成しているのかを、体系的に考察した最初の経験的研究である。このような経験的研究の蓄積は、例えば、教育や教示の場面において、より効率的な学習を促すのに資するかもしれない。しかし、もっと重要なことは次の点にある。私たちは、人を知覚するとき、最初に言葉を聞き振舞いを見て、そこからその人を人として判断しているわけではなく、最初から人として端的に把握している。このことの倫理的帰結を考えることが、次の課題となる。

研究成果の概要(英文)：There have been a substantial number of psychological studies of cross-modal perception. They mainly focus on the mutual influences between different modalities of perception. In philosophy, phenomenologists have pointed out the importance of "synesthesia" such as hearing the rigidity of glass (without touching it). Furthermore, while seeing the same object, one may see it differently (as when seeing a trompe l'oeil; cf. Wittgenstein on "aspect seeing"). This research project has analyzed the video recordings of various naturally occurring interactions, using conversation analysis as the methodology, and showed that various multimodal perceptions are organized as constituent parts of specific actions in distinct activities. The result has implications for the organization of various instructions (such as instructions on how to see things appropriately) and, moreover, for the ethical issue of the perception of human beings.

研究分野：社会学

キーワード：会話分析 概念分析 相互行為 アスペクト知覚 複合感覚 ウィトゲンシュタイン 行為 活動

## 1. 研究開始当初の背景

心理学では、錯覚研究において、異なる様式の知覚が相互に影響しあうことが研究されていた。口の形状が発音された音の聞き方に与える影響、光の見え方が音の聞こえ方に与える影響などが盛んに研究されていた。一方、哲学では、とくに現象学において、「ガラスの硬さを見る」というような「共感覚」の重要性が、指摘されてきた。共感覚的現象は、実際に触れていなくても、触覚の状態（硬さ）を見るという、異なる知覚様式の相互影響とは異なる現象である。しかし、いずれの現象も、実際の生活においてどのような意味を持つかは、あまり研究されていない。

## 2. 研究の目的

同じものを見ていても、(だまし絵のように)それが多様な見え方を許容することがある。このような多様な見え方を、ヴィトゲンシュタインは「アスペクト」と呼んだ。ヴィトゲンシュタインによれば、異なる視覚対象のうちどちらを見ているかは、例えば、指示表現(「これ」など)と指さしを用いたり、あるいは、その対象を絵に描いたりすることで、示すことができる。しかし、同じ対象の(だまし絵の異なる見え方のような)異なるアスペクトを示すときは、指さそうとしても同じ方向しか指させないし、絵を描こうとしても同じ対象(同じだまし絵)を描くことしかできない。一方、異なる知覚間の相互影響や共感覚も、アスペクトの知覚としてとらえ直すことができる。そこで、どのようなアスペクトの知覚が、実際の日常の活動のなかでどう達成されているか、という課題が見いだせる。この研究では、実際の相互行為をつぶさに観察することを通して、この課題に答えることを目指す。

## 3. 研究の方法

実際の相互行為(子どもの遠足、書道の教授、助産院での触診など)をビデオに収録し、会話分析の方法を用いて、それを分析する。会話分析の方法は、単に観察可能な一般的なパターンを析出することを目指すわけではない。相互行為参加者自身が自分たちの行為や知覚をどう把握しているかを、相互行為の詳細のうちに見だし、その観察を集積する。それにより、かれら自身による行為・知覚の組織を明らかにすることを目指す。その方法は、じつは、哲学における概念分析の方法(表現がどのように用いられているかを表現同士の結合関係から分析する方法)に近い。概念分析が用いる概念使用者の直観を、いわば実際の相互行為のビデオの観察によって統制するものである。本研究は、会話分析の研究であるとともに、哲学の研究でもある。

## 4. 研究成果

ここでは、(1)同じ対象をどのように異なるやり方で見ると、(2)見え方のうちに、視覚以外の知覚様式のアスペクトをどのように見るか、(3)複数の知覚様式がどのようなまとまりとして把握されているか、の3点について、研究期間中に得られた知見を紹介する。

(1)多様な見え方「細かく見ることをする」やり方がある。例えば、顔を対象に近づけるなどが、その一つである。ここでは、とくに相手の身体に視線を固定しながら、同じ語句を繰り返すという振舞いについて分析する。「細かく見ること」は、対象に関するより詳細な情報を得ることを目的になされると、考えがちである。しかし、ここでは、細かく見ることは、むしろ特定活動において特定行為を行なうことだということを示したい。以下の事例は、地域の子どもの遠足における、河原での火起こしの場面である。この場面を仕切っている船田(FD)は、火の起こった焚火に炭を置くよう、子ども(「三上君」CH)に教示する(01,06行目)。しかし、子どもは、その焚火を通り過ぎて、まだ火の起こっていないほうの焚火へと向かう(07行目)。

### (1) [川遊び]

01 FD: は::い、炭:: こっち: のつけて:: 自分のぶ:ん。  
02 (0.6)  
03 FD: は::い。  
04 (0.8)  
05 TK: よし::  
06 FD: は::い この上へのつけてくださ::い。|  
fd: -->> 火を見る ----->|





(3) 異なる知覚様式の統合 私たちが普通に暮らすとき、一つの知覚様式だけで物に出会うことは、むしろまれである。複数の知覚様式が活動にどうかかわり何を達成するのかを、一つの事例で示しておこう。以下は、助産院における触診である。妊婦が、自分の脇腹に触れながら、胎児の足の位置の変化を訴える(1行目)。

(3) [妊婦健診]

01 妊婦: >だんだん さがってきて< この「へんに:

02 助産師: L. HEHH

03 助産師: ん:::ん. 「<sup>o</sup>'んのね° .hh |形」が=

04 妊婦: 「これ あし です よ|ね。」

助産師: |妊婦の腹部に両手で触れる

05 助産師: =これ |頭:「:.

助産師: |児頭を手で押す

06 妊婦: L° ん°

図 3

図 4

07 助産師: ↓背中::: |お尻:::.  
助産師: |児背を押す |胎児の臀部を押す  
(5行省略)



図 3



図 4

13 助産師: { .hh / (0.6) } で >ほら< あし. h ° ね°.

01 行目の妊婦の訴えは、単なる報告ではなく、「潜在的問題」(骨盤位 [逆子] の可能性など)の提示と聞くことができるし、助産師は、実際にそう聞いているように見える。それに対して、言及された足の位置の変化が正常なものであることを助産師は実演的に示していく(3行目以降)。助産師は「形が」と切り出す(03行目)。この「形が」は、文法的には主節を作っているが、それに対する述部は出現しない。それは、あくまでも、胎児の形を示すための、相互行為的なスペースを作るためのものである。続いて助産師は、「これ[が]x」という(それ自体文法的に完結した文の)形式を用いて、胎児の3つの主要部位の名を挙げながら、順次それに触れていく(5~7行目)。2の点に注意したい。第1に、妊婦も助産師も妊婦の腹部に視線を向けている(図3,4)。ここから、助産師は、胎児の3つの主要部位の位置を、妊婦の腹部の上に示すことで、妊婦の腹部の表面に胎児の「形」をいわば写像していると、まずは言えるだろう。言い換えれば、まずは、胎児の形を視覚的に示していると言える。しかし、第2に、助産師は、妊婦の腹部に触れているだけではなく、腹部の特定箇所を両手で押している。つまり、助産師は、妊婦に対して、胎児の主要部位の位置を視覚的に示しているだけではなく、自らその部位を触覚的に感じていることを示している。また妊婦自身も、腹部の皮膚上に外側から助産師の手による圧迫を感じているし、かつ腹部の内側から胎児の主要部位による圧迫を感じているだろう。このように、単に「形」を写像して見せるだけではなく、確かにそこに主要部位があることを(助産師自身が感じていることを)視覚的かつ触覚的に示すことが、妊婦の潜在的問題に対する対処として重要である。

最後に足の位置が、正常な胎位に位置づけられている(13行目)。視覚と触覚は、潜在的問題への対処という活動において特定のやり方で統合され、胎位の正常性を示すという具体的行為を構成していることが、この事例から見てとれよう。(以上、Nishizaka, 2020bより)

(4) まとめ 本研究は、複様式知覚が、私たちが日々実際に営む相互行為のなかで、どのように達成され、あるいは何を達成しているのかについて、体系的に考察した最初の経験的研究である。現象学者たち(M. メル=ポンティ, G. ベーメ, B. ヴアルデンフェルスら)が主張しているように、私たちの知覚は、それぞれ独立の知覚様式がまずあって、後からそれが統合されて世界が経験されるわけではない(そういう意味で、上の(3)で「統合」という言い方をしたのは正確ではない)。私たちの知覚は、まずは複様式的に世界を(ベーメの表現では、まずは「雰囲気」を)とらえる。本研究は、経験的研究として、このことと真摯に向かいあうための第一歩である。

このような経験的研究の蓄積は、例えば、教育や教示の場面において、より効率的な学習を促すかもしれない。しかし、もっと重要なことは次の点にある。私たちは、人を知覚するとき、まずは人として端的に把握している。最初に言葉を聞き振舞いを見て、そこから、その人を人として判断しているわけではない。このことが持ちうる倫理的帰結をきちんと考えることが、次の課題となるだろう。

#### 引用文献

- Nishizaka, A. 2020a. Appearance and action. *ROLSI*, 53(2).  
 Nishizaka, A. 2020b. Multi-sensory perception during palpation in Japanese midwifery practice. *Social Interaction*, 3(1).  
 Nishizaka, A. 2022. The granularity of seeing in interaction. *JOP*, 190.  
 山田圭一, 2023. 「レッスンのなかで見るといふこと」『実践の論理を描く』。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計30件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>山田圭一                                   | 4. 巻<br>1             |
| 2. 論文標題<br>レッスンのなかで見るとということ                      | 5. 発行年<br>2023年       |
| 3. 雑誌名<br>実践の論理を描く 相互行為のなかの知識・身体・こころ（小宮友根・黒嶋智美編） | 6. 最初と最後の頁<br>238-271 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                    | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難           | 国際共著<br>-             |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>早野薫                                    | 4. 巻<br>1           |
| 2. 論文標題<br>質問に対する2つ（以上）の応答                       | 5. 発行年<br>2023年     |
| 3. 雑誌名<br>実践の論理を描く 相互行為のなかの知識・身体・こころ（小宮友根・黒嶋智美編） | 6. 最初と最後の頁<br>24-40 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                    | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難           | 国際共著<br>-           |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>荒野侑甫                                   | 4. 巻<br>1             |
| 2. 論文標題<br>同一性と身体性                               | 5. 発行年<br>2023年       |
| 3. 雑誌名<br>実践の論理を描く 相互行為のなかの知識・身体・こころ（小宮友根・黒嶋智美編） | 6. 最初と最後の頁<br>194-211 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                    | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難           | 国際共著<br>-             |

|  |                    |
|--|--------------------|
| 1. 著者名<br>山田圭一                                   | 4. 巻<br>49         |
| 2. 論文標題<br>悲しみを見るときはどのようなことか ウィトゲンシュタインの直接知覚説の検討 | 5. 発行年<br>2022年    |
| 3. 雑誌名<br>哲学論叢                                   | 6. 最初と最後の頁<br>1-11 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                    | 査読の有無<br>無         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難           | 国際共著<br>-          |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>山田圭一                             | 4. 巻<br>1185          |
| 2. 論文標題<br>意味は体験されるのか 『哲学探究』第一部と第二部の違いを考える | 5. 発行年<br>2022年       |
| 3. 雑誌名<br>思想                               | 6. 最初と最後の頁<br>104-119 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし             | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難     | 国際共著<br>-             |

|  |                    |
|--|--------------------|
| 1. 著者名<br>鬼界彰夫・野矢茂樹・古田徹也・山田圭一          | 4. 巻<br>1185       |
| 2. 論文標題<br>討議 ウィトゲンシュタインを読むとはどういうことか   | 5. 発行年<br>2022年    |
| 3. 雑誌名<br>思想                           | 6. 最初と最後の頁<br>5-34 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-          |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>Nishizaka Aug                                  | 4. 巻<br>190           |
| 2. 論文標題<br>The granularity of seeing in interaction      | 5. 発行年<br>2022年       |
| 3. 雑誌名<br>Journal of Pragmatics                          | 6. 最初と最後の頁<br>24 ~ 40 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.1016/j.pragma.2021.12.016 | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                   | 国際共著<br>-             |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>鈴木南音                         | 4. 巻<br>73(1)       |
| 2. 論文標題<br>絵を描いて見せることの会話分析             | 5. 発行年<br>2022年     |
| 3. 雑誌名<br>社会学評論                        | 6. 最初と最後の頁<br>19-36 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-           |

|  |                         |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名<br>鈴木南音                                     | 4. 巻<br>6(3)            |
| 2. 論文標題<br>アスペクトの転換と凝結 舞台制作場面の相互行為におけるアスペクト知覚の会話分析 | 5. 発行年<br>2021年         |
| 3. 雑誌名<br>フィルカル                                    | 6. 最初と最後の頁<br>248 ~ 267 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                     | 査読の有無<br>有              |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難             | 国際共著<br>-               |

|  |                         |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名<br>Nishizaka Aug  | 4. 巻<br>172             |
| 2. 論文標題<br>Partitioning a population in agreement and disagreement | 5. 発行年<br>2021年         |
| 3. 雑誌名<br>Journal of Pragmatics                                    | 6. 最初と最後の頁<br>225 ~ 238 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.1016/j.pragma.2020.11.015           | 査読の有無<br>有              |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                             | 国際共著<br>-               |

|   |                 |
|---|-----------------|
| 1. 著者名<br>Nishizaka Aug   | 4. 巻<br>3       |
| 2. 論文標題<br>Multi-Sensory Perception during Palpation in Japanese Midwifery Practice | 5. 発行年<br>2020年 |
| 3. 雑誌名<br>Social Interaction. Video-Based Studies of Human Sociality                | 6. 最初と最後の頁<br>- |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.7146/si.v3i1.120256                                  | 査読の有無<br>有      |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている(また、その予定である)   | 国際共著<br>-       |

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>Nishizaka, Aug   | 4. 巻<br>23(6)   |
| 2. 論文標題<br>Seeing and Knowing in Interaction: Two Distinct Resources for Action Construction | 5. 発行年<br>2021年 |
| 3. 雑誌名<br>Discourse Studies [採択済]  | 6. 最初と最後の頁<br>- |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし   | 査読の有無<br>有      |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難   | 国際共著<br>-       |



|  |                    |
|--|--------------------|
| 1. 著者名<br>山田圭一・池田喬・佐藤暁                 | 4. 巻<br>5(2)       |
| 2. 論文標題<br>哲学対話: 言葉による言葉の吟味としての        | 5. 発行年<br>2020年    |
| 3. 雑誌名<br>フィルカル                        | 6. 最初と最後の頁<br>6-45 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-          |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>山田圭一   | 4. 巻<br>41            |
| 2. 論文標題<br>社会科学の方法論について哲学は何を語りうるのか - ウィンチのウィトゲンシュタインの解釈の検討を通じて - | 5. 発行年<br>2020年       |
| 3. 雑誌名<br>人文公共学研究論集 (千葉大学)                                       | 6. 最初と最後の頁<br>131-142 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                                   | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                           | 国際共著<br>-             |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>Aug Nishizaka   | 4. 巻<br>1             |
| 2. 論文標題<br>Postscript: Thing and space  | 5. 発行年<br>2019年       |
| 3. 雑誌名<br>Dennis Day and Johanness Wagner (eds.), Objects, Bodies and Work Practice | 6. 最初と最後の頁<br>285-294 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし  | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難  | 国際共著<br>-             |

|   |                  |
|---|------------------|
| 1. 著者名<br>Aug Nishizaka   | 4. 巻<br>53       |
| 2. 論文標題<br>Appearance and Action: Sequential Organization of Instructions in Japanese Calligraphy Lessons | 5. 発行年<br>2020年  |
| 3. 雑誌名<br>Research on Language and Social Interaction   | 6. 最初と最後の頁<br>未定 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.1080/08351813.2020.1739428   | 査読の有無<br>有       |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難  | 国際共著<br>-        |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>西阪 仰                         | 4. 巻<br>38          |
| 2. 論文標題<br>会話分析トレーニング・セッション            | 5. 発行年<br>2019年     |
| 3. 雑誌名<br>日本語学                         | 6. 最初と最後の頁<br>46-56 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-           |

|   |                  |
|---|------------------|
| 1. 著者名<br>Aug Nishizaka   | 4. 巻<br>1        |
| 2. 論文標題<br>Guided Touch: Sequential Organization of Feeling a Fetus at Japanese Midwifery Practices | 5. 発行年<br>2020年  |
| 3. 雑誌名<br>A. Cekaite & L. Mondada (Eds.), Touching Moments  | 6. 最初と最後の頁<br>未定 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし  | 査読の有無<br>無       |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難  | 国際共著<br>-        |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>山田圭一   | 4. 巻<br>49          |
| 2. 論文標題<br>言葉の学習におけるアスペクト知覚の役割 ウィトゲンシュタインの直示的教示の考察を通じて | 5. 発行年<br>2019年     |
| 3. 雑誌名<br>人文科学研究 (千葉大学文学部編)                            | 6. 最初と最後の頁<br>51-69 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.20776/S03862097-49-P51  | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                 | 国際共著<br>-           |

|   |                     |
|---|---------------------|
| 1. 著者名<br>山田圭一  | 4. 巻<br>47          |
| 2. 論文標題<br>眺望から人称を排除することができるのか 野矢茂樹『心という難問 空間・身体・意味』への懐疑論者からの応答 | 5. 発行年<br>2019年     |
| 3. 雑誌名<br>科学基礎論研究 (科学基礎論学会編)                                    | 6. 最初と最後の頁<br>47-55 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.4288/kisoron.47.1_47             | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                          | 国際共著<br>-           |

|   |                  |
|---|------------------|
| 1. 著者名<br>Yusuke Arano  | 4. 巻<br>22       |
| 2. 論文標題<br>Doing reflecting: Embodied solitary confirmation of instructed enactment | 5. 発行年<br>2020年  |
| 3. 雑誌名<br>Discourse Studies   | 6. 最初と最後の頁<br>未定 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.1177/1461445620906037                                | 査読の有無<br>有       |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難  | 国際共著<br>-        |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>西阪仰                               | 4. 巻<br>1             |
| 2. 論文標題<br>会話分析はどこへ向かうのか                    | 5. 発行年<br>2018年       |
| 3. 雑誌名<br>平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実編『会話分析の広がり』 | 6. 最初と最後の頁<br>253-279 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし              | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難      | 国際共著<br>-             |

|  |                   |
|--|-------------------|
| 1. 著者名<br>山田圭一   | 4. 巻<br>46        |
| 2. 論文標題<br>言葉の意味の変化をもたらす体験とはどのようなものか ウィトゲンシュタインの比喩的表現の考察をもとに | 5. 発行年<br>2018年   |
| 3. 雑誌名<br>科学基礎論研究  | 6. 最初と最後の頁<br>1-9 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.4288/kisoron.46.1_1           | 査読の有無<br>有        |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                       | 国際共著<br>-         |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>山田圭一  | 4. 巻<br>4             |
| 2. 論文標題<br>人は人ならざるものと恋愛することができるのか 「シェイプ・オブ・ウォーター」と「エクス・マキナ」を題材に | 5. 発行年<br>2019年       |
| 3. 雑誌名<br>フィルカル   | 6. 最初と最後の頁<br>136-159 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                                  | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                          | 国際共著<br>-             |

|  |                      |
|--|----------------------|
| 1. 著者名<br>山田圭一                           | 4. 巻<br>1            |
| 2. 論文標題<br>人はAIと恋愛することができるのか             | 5. 発行年<br>2018年      |
| 3. 雑誌名<br>吉川孝・横地徳広・池田喬編著、『映画で考える生命環境倫理学』 | 6. 最初と最後の頁<br>87-101 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし           | 査読の有無<br>無           |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難   | 国際共著<br>-            |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>早野薫                          | 4. 巻<br>20            |
| 2. 論文標題<br>レヴィンソンが牽引するインタラクション研究       | 5. 発行年<br>2018年       |
| 3. 雑誌名<br>語用論研究                        | 6. 最初と最後の頁<br>160-167 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-             |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>早野薫                               | 4. 巻<br>1             |
| 2. 論文標題<br>認知的テリトリー 知識・経験の区分と会話の組織          | 5. 発行年<br>2018年       |
| 3. 雑誌名<br>平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実編『会話分析の広がり』 | 6. 最初と最後の頁<br>193-224 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし              | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難      | 国際共著<br>-             |

|  |                         |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名<br>Aug Nishizaka  | 4. 巻<br>1               |
| 2. 論文標題<br>Aspect-seeing in the interactional organization of activities   | 5. 発行年<br>2018年         |
| 3. 雑誌名<br>Donald Favareau (ed.), Co-Operative Engagements in Intertwined Semiosis: Essays in Honor of Chales Goodwin | 6. 最初と最後の頁<br>345 ~ 354 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし   | 査読の有無<br>無              |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難   | 国際共著<br>-               |

|   |                         |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名<br>Aug Nishizaka   | 4. 巻<br>2               |
| 2. 論文標題<br>A sentence dispersed within a turn-at-talk: Response-opportunity places as loci for interactional work | 5. 発行年<br>2017年         |
| 3. 雑誌名<br>East Asian Pragmatics   | 6. 最初と最後の頁<br>229 ~ 258 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.1558/eap.34561   | 査読の有無<br>有              |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難  | 国際共著<br>-               |

|  |                         |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名<br>Kaoru Hayano   | 4. 巻<br>2               |
| 2. 論文標題<br>When (not) to claim epistemic independence: The use of ne and yone in Japanese conversation | 5. 発行年<br>2017年         |
| 3. 雑誌名<br>East Asian Pragmatics  | 6. 最初と最後の頁<br>163 ~ 193 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.1558/eap.34740  | 査読の有無<br>有              |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難   | 国際共著<br>-               |

〔学会発表〕 計23件 (うち招待講演 7件 / うち国際学会 7件)

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>Aug Nishizaka   |
| 2. 発表標題<br>Experiencing Space: Two Uses of Japanese Proximal Spatial Deictic Expressions               |
| 3. 学会等名<br>The Centre for Advanced Studies in Language & Communication (the University of York) (招待講演) |
| 4. 発表年<br>2023年  |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>Aug Nishizaka, Masafumi Sunaga, Kotaro Sambe  |
| 2. 発表標題<br>Ideas Distributed among Multiple Voices: Discussions in Protests against the Construction of Narita International Airport |
| 3. 学会等名<br>American Sociological Association   |
| 4. 発表年<br>2022年  |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Aug Nishizaka  |
| 2. 発表標題<br>Seeing and touching in interaction: Doing "inspecting" and action construction             |
| 3. 学会等名<br>The importance of touch during the time of covid: An international symposium (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年<br>2022年   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Aug Nishizaka  |
| 2. 発表標題<br>Doing " inspecting " in interaction: Seeing the physiognomy of an object                           |
| 3. 学会等名<br>Lecture at "AdvancingMultimodal Conversation Analysis " Summer School (University of Basel) (招待講演) |
| 4. 発表年<br>2022年   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>山田圭一                         |
| 2. 発表標題<br>「公共」的な見方とは何か 学習指導要領を哲学的に問い直す |
| 3. 学会等名<br>日本倫理学会                       |
| 4. 発表年<br>2022年                         |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>西阪 仰                                    |
| 2. 発表標題<br>相互行為における「見ること」と「触れること」 「詳細を調べること」と行為の構成 |
| 3. 学会等名<br>人工知能学会: 言語・音声理解と対話処理研究会 (招待講演)          |
| 4. 発表年<br>2022年                                    |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Nishizaka, Aug   |
| 2. 発表標題<br>The Ascribability of Action in Interaction: Revisiting the Status/Stance Distinction |
| 3. 学会等名<br>American Sociological Association  |
| 4. 発表年<br>2020年   |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>山田圭一                                  |
| 2. 発表標題<br>悲しみを見るときはどのようなことか ウィトゲンシュタインの直接知覚説の検討 |
| 3. 学会等名<br>第68回ウィトゲンシュタイン研究会                     |
| 4. 発表年<br>2020年                                  |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>早野薫                              |
| 2. 発表標題<br>形式と相互行為機能の適合： 極性質問に対する応答の拡張に着目して |
| 3. 学会等名<br>日本英語学会第38回大会                     |
| 4. 発表年<br>2020年                             |

|                                |
|--------------------------------|
| 1. 発表者名<br>早野薫                 |
| 2. 発表標題<br>相互行為における認識性         |
| 3. 学会等名<br>日本語用論学会第23回大会（招待講演） |
| 4. 発表年<br>2020年                |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Hayano, Kaoru  |
| 2. 発表標題<br>Reporting for and about a child: Addressing a child in talk between nursery teachers and parents |
| 3. 学会等名<br>Center for Language, Interaction and Culture 定例研究発表会 (招待講演)                                      |
| 4. 発表年<br>2021年   |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>Arano, Yusuke                                   |
| 2. 発表標題<br>Revisiting ownership of language                |
| 3. 学会等名<br>4th CAN-Asia Symposium on L2 Interaction (国際学会) |
| 4. 発表年<br>2021年  |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Aug Nishizaka  |
| 2. 発表標題<br>Partitioning the Participation Population Space in Reaching a Mutual Agreement |
| 3. 学会等名<br>American Sociological Association  |
| 4. 発表年<br>2019年   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Tomone Komiya & Aug Nishizaka  |
| 2. 発表標題<br>Accomplishing the Intelligibility of the Distinctiveness of Activity |
| 3. 学会等名<br>American Sociological Association                                    |
| 4. 発表年<br>2019年   |



|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>Aug Nishizaka   |
| 2. 発表標題<br>The differentially ascribable nature of seeing: Projects and visual perception                  |
| 3. 学会等名<br>Conference of the International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis (国際学会) |
| 4. 発表年<br>2019年  |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Aug Nishizaka  |
| 2. 発表標題<br>The ascribability of action in interaction: Revisiting the status/stance distinction |
| 3. 学会等名<br>American Sociological Association  |
| 4. 発表年<br>2020年   |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>山田圭一  |
| 2. 発表標題<br>感覚は言語によってどこまで伝えることができるのか ウィトゲンシュタインの私的言語論を手がかりに |
| 3. 学会等名<br>第3回 人間知・脳・AIセミナー                                |
| 4. 発表年<br>2019年  |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>Kaoru Hayano  |
| 2. 発表標題<br>Off-stage negotiation of who is going to serve: Resources for embodying requests and offers |
| 3. 学会等名<br>第16回国際語用論学会 (国際学会)  |
| 4. 発表年<br>2019年  |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Aug Nishizaka  |
| 2. 発表標題<br>Perception that matters in interaction                               |
| 3. 学会等名<br>International Conference on Conversation Analysis 2018 (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年<br>2018年   |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>Aug Nishizaka   |
| 2. 発表標題<br>Mixed perceptions in instructional settings: seeing under the aspect of proprioception relevant to the current activity |
| 3. 学会等名<br>International Conference on Conversation Analysis 2018 (国際学会)   |
| 4. 発表年<br>2018年  |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Aug Nishizaka  |
| 2. 発表標題<br>Seeing how it is done: The sequential organization of instructional actions in a Japanese calligraphy lesson |
| 3. 学会等名<br>EARLI SIG 14 Conference (国際学会)   |
| 4. 発表年<br>2018年   |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>山田圭一                                |
| 2. 発表標題<br>人の悲しみを見るときはいかなることか ウィトゲンシュタインの直接知覚説 |
| 3. 学会等名<br>日本現象学会                              |
| 4. 発表年<br>2018年                                |

|                                      |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>山田圭一                      |
| 2. 発表標題<br>ゲシュタルト的まとまりは認識論的役割を果たしうるか |
| 3. 学会等名<br>科学基礎論学会例会                 |
| 4. 発表年<br>2017年                      |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

|   |
|---|
| 西阪仰研究室<br><a href="http://www.augnishizaka.com/">http://www.augnishizaka.com/</a> |
|---|

6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                       | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                 | 備考 |
|-------|---|---------------------------------------|----|
| 研究分担者 | 山田 圭一<br><br>(Yamada Keiichi)<br><br>(30535828) | 千葉大学・大学院人文科学研究院・教授<br><br><br>(12501) |    |
| 研究分担者 | 早野 薫<br><br>(Hayano Kaoru)<br><br>(20647143)    | 日本女子大学・文学部・准教授<br><br><br>(32670)     |    |

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)   | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|-------|-----------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 荒野 侑甫<br><br>(Arano Yusuke) |                       |    |

6. 研究組織（つづき）

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)    | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|-------|------------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 鈴木 南音<br><br>(Suzuki Minato) |                       |    |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|         |         |